

最優秀選手賞◆鈴木悠平四段・23歳
(三井住友海上・本店)

「今回の優勝は社会人となってからは初のタイトルになります。主将の小田口先輩を中心にして、昨年から優勝を目指して取り組んできましたから本当にうれしい結果です。東日本震災の影響もあって本来の業務が大変に厳しく、個人的には週に一回、土曜日の稽古に取り組むのがやっとの状況でしたが、強い気持ちと集中力を保ってどうにかカバーして臨みました」



準決勝

【大将】下川(東洋水産・本社)①— 野村(富士ゼロックス東京・本社)

▲中堅戦を落とし、何とか追いつきたい野村は初太刀からメンに跳ぶも、これを待ち受けていた下川がコテに打ち取る(写真)。勝利への選択技は二本勝ちしか残されていない野村だが、有効打を得ることはできなかった

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
東洋水産(本社)		庄司	石川	青木	久木原	下川	2
		×	×	◎	×	◎	2
富士ゼロックス東京(本社)		小室	堀	倉ヶ崎	新海	野村	0



準決勝

【中堅】高村(三井住友海上・本店)④— 岡(NTT東日本・東京)

▲中堅戦は全日本選手権出場経験者の対戦となった。高村が見事な出ばなメンで先制するも(写真)、二本目の開始と同時に今度は岡がメンで返す。勝敗を決する一打となったのは高村のメン。好勝負に決着をつけた

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
三井住友海上(本店)		鈴木	石井	高村	外之内	小田口	1
		×	×	◎	×	×	2
NTT東日本(東京)		今村	若松	岡	梅山	山本	1



中堅戦。高村(三井住友海上)が青木の初太刀のメンを読んでドウに打ち取った(写真)。結果的にこれが決勝打となった

し、中堅以降を高村、外之内、小田口ら経験豊富な選手で固めて大会に臨んだ三井住友海上。決勝戦の相手となったのは東洋水産だったが、ここでは先鋒の鈴木、中堅の高村が確実にポイントを挙げ、結果的には相手に白星を許すことなく完封勝利での優勝。最優秀選手賞は、2回戦の富士ゼロックス(港)戦でも代表戦で勝利を挙げた鈴木が受賞した。

実業団大会では上位常連の同社だが、この関東大会での優勝は第50回大会(平成20年)以来のこと。昨年、一昨年の第51回・52回大会ではベスト4進出も叶わ

なかっただけに喜びもひとしおな様子で、決勝戦終了後には選手全員の目には涙が見られた。

先鋒の勝利に続いて貴重な勝ち星を奪った高村。過去、東京都代表として全日本選手権大会への出場経験もあるが、現在は仕事の都合により、群馬県に単身赴任中の身である。高村に、今大会に臨むにあたっての意気込みを尋ねると「東日本大震災で被災された方々のために」との言葉が聞かれた。震災後、保険会社という仕事柄、現地に赴いての勤務も経験したそうで今回の戦いに向けては心には

期するものがあつたようだ。また、奇しくも今年は三井住友海上となつて十周年の節目の年だという(2001年に三井海上火災と住友海上火災が合併)。

「絶対に勝つという強い気持ちで稽古に臨んできたましたから、今回の結果はやはり格別ですね」と笑顔を見せた。

チームを率いた下畑精一郎監督もまた涙で目を赤くしつつも笑顔でコメント。「今日の結果は、稽古量も減った中で、剣道ができることに感謝しながら取り組んできた成果かと思えます」



決勝

【先鋒】鈴木(三井住友海上・本店)①— 庄司(東洋水産・本社)

ともに安房高校(千葉)の出身者で先輩(鈴木)と後輩の間柄。鈴木がメンに跳べば、庄司もいい機会にコテを放って反撃。両者の気迫がぶつかりあう。ややあって、鈴木の出ゴテが完璧に決まる(写真)。以降は鈴木が庄司の攻めをさばき大きな一勝を得た

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
三井住友海上(本店)		鈴木	石井	高村	外之内	小田口	2
		×	×	×	×	×	2
東洋水産(本社)		庄司	石川	青木	久木原	下川	0

第53回関東実業団剣道大会 三井住友海上(本店) 9度目の 王座に輝く

平成23年6月5日(日) 日本武道館
主催◆関東実業団剣道連盟
撮影◆窪田正仁

関東実業団剣道連盟に所属する企業が集う本大会だが、3月に起きた東日本大震災の影響は大きく、今大会の参加チームは前年より16チーム減の185チームとなった。日本経済復興のために戦う企業剣士たちは今年も熱戦を展開。三井住友海上(本店)、東洋水産(本社)という優勝経験のある強豪同士で争われた決勝戦は、伝統の底力を見せつけた三井住友海上に凱歌が上がった。

東日本大震災後初の開催となる実業団大会には、2011チームあつた昨年の参加企業数よりも16チーム少ない185チームがエントリー。参加チーム減という事態からは未だ続く震災の影響と、その困難に立ち向かう民間企業の日々の奮闘が慮られるが、日本武道館に集った参加チームは一心不乱に剣を振るった。

近年はまさに「群雄割拠」と呼ぶにふさわしいほどに、古豪、新鋭が入り乱れる混戦、番狂わせが多い実業団剣道界だが、今大会のベスト4に進出したのは、三井住友海上(本店)、東洋水産(本社)、NTT東日本(東京)、富士ゼロックス東京(本社)と、いずれも強豪として名を馳せる伝統チームばかり。

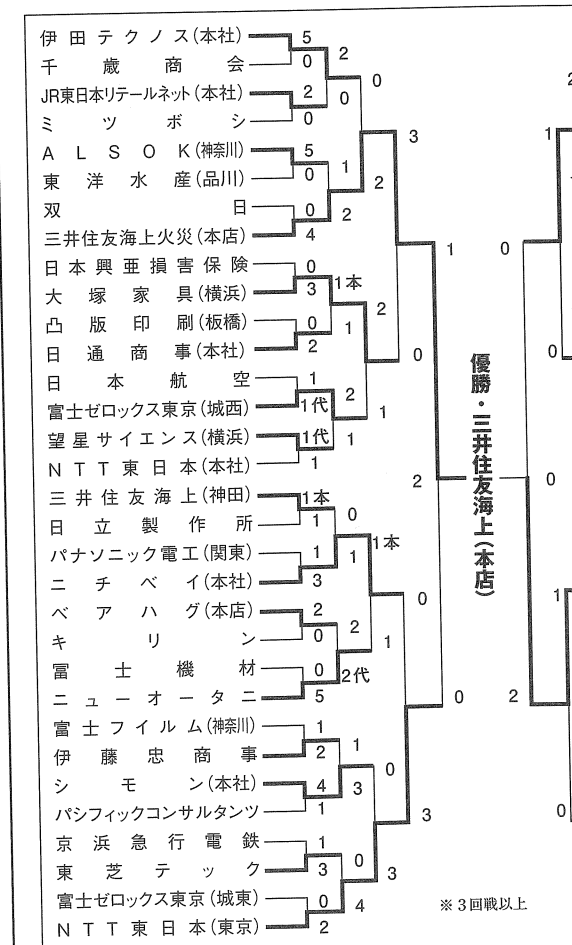
熾烈な上位争いの結果、優勝の栄冠に輝いたのは、過去8度の優勝を誇る三井住友海上であった。

先鋒、次鋒に23歳の若手剣士・鈴木(法政大学出身)と石井(立教大学出身)を配



優勝◆三井住友海上(本店)

小田口享弘、外之内貴洋、高村泰央、石井将勝、鈴木悠平。監督=下畑精一郎



3位◆NTT東日本(東京)
山本有樹、梅山義隆、岡晋輔、若
今村洋輔、下宮二晃。監督〓谷裕二

3位◆富士七只久々東京本社
野村慶徳、新海幹之、倉ヶ崎雅人、堀二彦、
小室俊介、磯山大樹。監督Ⅱ野上誠一



本大会上位の試合映像を、「剣道ナビ」で見ることができます
(剣道ナビについては52ページをご覧ください)



5回戦 大塚家具(横浜) 2-1 富士ゼロックス東京(城西)

ト4という結果となった。

N T T 東日本は、先鋒に今村、次鋒に若松といった20代前半の若手を配すも、中堅以降は岡、梅山、山本ら勝負のツボを知るベテランで固めて臨んだ。チームの連係がうまく噛み合っていたことは、今大会中喫した黒星が敗れた準決勝での中堅戦のみという結果と、そこに至るまでの5試合すべてで2勝以上の差をつけて勝利していることから見て取れる。

25歳から30歳までの脂の乗った年代の選手で固めた富士ゼロックス東京は、大会前半は機動力を活かして大差の勝利を挙げつつ、大会が進むに連れて徐々にしぶとさを發揮、接戦、混戦を制して勝ち上がった。多様な勝ちパターンを見せていただけに準決勝の東洋水産との戦いでも勝利の目はあったように思うが、中堅戦での失点を追う展開を強いられたのが悔やまれるところだろうか。

準々決勝 東洋水産(本社) 1—0 NTT
【副将】下川 × 国本

▲東洋水産の先鋒庄司がわずか1分半ほどで対する竹越を下せば、その後は引き分けが続く緊迫の展開。大将戦、必死の攻めを見せる国本だったが下川も崩れることはなかった(写真は攻防)

惜しくも準優勝にとどまった東洋水産もまた上位常連の印象が強いが、優勝の記録となると昭和59年の第26回大会が最後となる。決勝進出は第49回大会（平成19年）以来だっただけに、何とも悔しい結果といえるだろう。

毎年有望な若手選手が入社している同社。不況といわれる経済状況の中、各企業が抱える課題のひとつである「チームの若返り」もスムーズに進んでいるように、5人のメンバー中30代の選手は副将の久木原（35歳）のみ。先鋒庄司は22歳、次鋒石川は23歳、中堅青木は25歳、大将

下川は26歳と、全体的に若さあふれるメンバー編成で臨んだ。大会の勝ち上がりもまた勢いを感じさせる内容で、1回戦の三井住友海上（新宿）戦は2―1の接戦、4回戦の東京海上日動（本店）戦は代表戦となるも、決勝を除いたそれ以外の5試合では相手に勝ち星を与えることはなかった。決勝戦でこそ経験の差を見せつけられたかたちにはなったが、選手がまだ若いだけに、今後のさらなる成長は大いに期待できるところだろう。

3位のNTT東日本、富士ゼロックス東京は、両チームともに2年連続のベス



準々決勝 NTT東日本(東京) 3—0 ニチベイ(本社)

【副将】梅山 ⊕×× 樋口

▲健闘光ったニチベイだが先鋒戦、中堅戦を落としてしまう苦しい展開。副将戦、梅山にドウで先制を許してしまい追いつかれた樋口(写真)。何とかメンを返しはしたが悔しい時間切れを迎えた



5回戦 富士ゼロックス東京(本社) 2—1 日本通運(本社)

【大将】野村 ⊗ コー× 中石

▲先鋒は富士ゼロックスが二本勝ち、次鋒は日本通運が一本勝ちで大将戦へ。野村が伸びのあるメンを奪うと(写真)、中石もメンで同点に。実力伯仲の試合は野村がコテを追加して制した



5回戦 三井住友海上(本店) 2-0 伊田テクノス(本社)

【副将】外之内 ⊗コ一 橋本

▲前年度覇者・伊田テクノスと三井住友海上の試合は先鋒から中堅までが引き分けに終わる。勝負が動いたのは副将戦。外之内が相メン(写真)、そしてコテと連取し、大きな勝ち星を得た